

## 「涅槃」(ニルヴァーナ)は「不動心」(アパテイア)か

—— 静寂主義として理解された仏教、およびその理解の文脈について ——

佐々木 一 憲

イギリスにおける科学思想の普及と仏教の受容とは、一九世紀中葉のほぼ同時期に急激に進んだが、これは偶然の一致ではない。本稿では当時を代表する科学啓蒙家T・ハクスリーの仏教理解をとり上げながら、その時代背景を概観してみたい。

### 一 ハクスリーとは——科学啓蒙家

#### イギリスの名家

T・ハクスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-1895) は、イギリスの生物学者であり、科学思想家である。彼のあとこの家系からは、のちにトマス同様ロマネス・レクチャーの講師となつて祖父トマスに批判的な講演を行うことになる生物学者のジュリアン、ノーベル医学・生理学賞を受賞したアンドリュウ、そして『素晴らしき世界』などの作品で知られる小説家のオルダスの「ハクスリー三兄弟」が出て、ハクスリー家はイギリス有

数の才人家系の一つに数え上げられることになった。

#### 「ダーウィンの番犬」

彼は、自他共に認める「ダーウィンの番犬」というあだ名が示すように、C・ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) の進化論の擁護者として最もよく知られている。このあだ名は、サミュエル・ウィルバーフォース司教との有名な「オックسفোর্ド論争」を契機に広く知られるようになったものである。このとき、キリスト教の護教勢力を代表する形で講壇に立ち進化論説を批判するウィルバーフォース司教をハクスリーが強烈に論破したことで、その後、後教勢力の権威が失墜し、進化論が広まることになったとされている<sup>1)</sup>。

ところで、番犬を自認する人物の態度としては少々不可解なのだが、ハクスリーはダーウィンの学説を全面的に認めていたのではなかった。むしろ彼の〈進化論〉の中心的な学説である

〈自然選択〉(natural selection) に関して、ハクスリーは自らの著作や講演の場で繰り返し態度を保留しているのである。生物の進化ということについても終に明確な支持を表明することはなかった。ではハクスリーはダーウィンのどのような点を評価して「番犬」を自認したのか。それはダーウィンの研究方法が極めて模範的な科学的<sup>②</sup>精神に貫かれていた点を評価してのことだったのである。すなわち、ハクスリーの考える理想的科学者像を体现するのがダーウィンであり、その存在はハクスリーにとって、学説の内容の是非をしばらく措いても擁護すべきものと考えられたのだった。松永俊男氏が巧みに評しているように「ハクスリーは『ダーウィン学説の番犬』ではなく、まさに『ダーウィンの番犬』だったのである」。

#### 科学思想の啓蒙家

ハクスリーは著名な生物学者ではあつたけれども、生物学の分野で何かその名声に値するような画期的な業績を挙げたり、教科書に載るような発見をしたのではなかった。彼の本領はむしろ、〈科学〉という、一九世紀になってようやく確固たる存在感を示し始めた新たな学知の形態の芽を守り、育て、次世代につなげるという、啓蒙家・教育家の側面にこそあつた。また彼は、科学を、今日のように伝統的な哲学とは切り離された別個の、いわゆる自然科学的な方面に特化した新たな知の形態として捉えるのではなく、むしろそうした風潮に対抗して、あくまで人文学の伝統知の延長線上にあるものとしての科学的な精

神や手法を擁護するという立場をとった人物であつた。

## 二 当時のイギリス言論界の概況

### 読書人口の増加と言論界の成立

本稿は、ハクスリーが一八九三年に行つたオックスフォード大学でのロマネス講演の講演録『進化と倫理』をもとに彼の仏教理解を検討しようとしているのだが、当のエッセイは公開レクチャーの講演録という性質上、聴衆の構成や、当時の言論界の情勢を大いに意識したものになっている。そのためその内容に込められた筆者の意図を十分に理解するためには、背景となつてゐる当時のイギリスの社会状況を概観しておくことが是非とも必要だろう。

J・J・フランクリンは、その著書 *The Lotus and the Lion: Buddhism and the British Empire* の中心、一九世紀後半、後期ヴィクトリア朝期のイギリスを仏教系の〈混成宗教〉(hybrid religion) が大流行した時代と位置づけて、そうした非伝統的な宗教が広まった社会的背景について詳しく考察している。<sup>③</sup>

まず人文学をめぐるこの時代の大きな変化として、産業革命・技術革新を経て中産階級が成長するとともに、初等教育の義務化により都市労働者層の識字率が大いに高まったことで読書人口が急激に拡大したことが指摘される。新聞や雑誌などの定期刊行物の発刊も相次ぐなど、知識の大衆化の流れが芽生え始めたのがこの時代であつた。

この変化を受けて、新しい時代の大衆に対して「知」とは何かを啓蒙・紹介する存在が求められた。その需要に応える形で最先端の知である「科学」の精神や方法、思考法を啓蒙し、その振興・普及に尽力した良識派知識人の代表的存在がこのT・ハクスリーという人物であった。彼らは同志を集めて知識人サークルを構成するのだが、彼らの間でその当時、一般読者層をも巻き込んで大いに議論された話題が〈進化論〉論争をめぐったものであった。

### 〈進化論 論争の影響〉

〈進化論〉論争は一八五九年のダーウィンの『種の起源』の発刊を契機に表面化した。進化論的な言説は必ずしもダーウィンが初めて言い出したことではなかったが、このときは前述の知識の大衆化という時代状況の変化が背景となり、同書の出版を契機にまず論壇においてヒートアップした論争が、印刷物を通じてさまざま大衆に波及して社会現象にまで発展したのである。

〈進化論〉をめぐる論争は、大衆化するに及んでやがて科学と宗教の対立という形に単純化され一段と先鋭化した。すなわち、A・P・コント (Isidore Auguste Marie François Xavier Comte, 1798-1857) に始まる実証主義 (Positivism) の流れを汲み、〈進化論〉という科学思想を奉じる進歩的知識人のグループと、聖書の記述を尊重し、教会の擁護に回ったキリスト教護教派のグループとの対立という形に収斂していったのである。

この対立の図式においてキリスト教護教派勢力はほどなく守勢に立たされることになった。これは必ずしも彼らが論争の場で破れたということではなかったのだが、現実社会において当時深刻化していた、都市労働者——読書家層と重なる——の貧困や住環境の悪化、凶悪犯罪の頻発などといった社会問題に対する大衆の不満が、「この世の不幸をなぜ全知全能の神は放置されるのか」という〈神義論〉的な疑念となつてキリスト教護教派に向けられたこと、そしてこの疑念に対してなら有効な解答を用意できないキリスト教側に対する失望が、彼らを次第ともかく、この論争を通じてキリスト教から民心は離れて行くことになった。

### 社会倫理に対する関心の高まりと仏教の流行

既成のキリスト教会への信仰を保てなくなった民衆は、魂の救済を代替宗教に求めるようになった。その現れが、スピリチュアリズム、オカルティズムの大流行であり、東洋の宗教、とりわけ仏教への関心の高まりであった。

何故仏教だったのか。当時のイギリス社会における宗教状況を研究したフランクリン (Franklin, *The Lotus and the Lion*, p.20) は、(1) 成立の経緯がプロテスタント (新教) と似ていること、(2) 開祖であるゴータマ・ブッダの生涯が魅力的であること、またその(3) 高い倫理性から、ほかならぬ仏教がイギリスの新興読書家層の心を捉えたのだと分析している。実際、当時の

仏教人気は大変なもので、ブッダの生涯を叙情的に綴ったサー・E・アーノルドの *The Light of Asia* は、一八七九年の発刊直後から空前の売れ行きを示し、社会現象と言われるまでになった。

こうして仏教への関心は当時の一般読書家層の隅々にまで行き渡り、一時期彼らの話題を独占することになるのだが、研究が進みその教理がより詳しく明らかにようになっていくにつれ、今度は知識人層がこの宗教を「合理的・科学的な宗教」と評価して重視するようになった。この「合理的・科学的な宗教」という表現で一般に意図されるのは、キリスト教的な人格神を立てないということ、〈特殊創造説〉を唱えない、ということであるが、この時の知識人層は特に、〈輪廻／業の思想〉を説くという点に注目した。今日では仏教における迷信・妄想の最たるものとされる〈輪廻／業の思想〉であるが、当時のイギリスにおいては業による転生を説くこの説が、遺伝と世代交代による生物種の進化を説く〈進化論〉のイメージと重なり、仏教は最新の科学である〈進化論〉と親和する宗教としてキリスト教護教派グループと対立していた進歩的知識人たちに大いに受容されることになったのである。

さて、こうして広く一般に浸透した仏教であるが、もとよりキリスト教への信仰を保てなくなった人々の受け皿として人気を集めたという性格が強くと、その教義理解の平均値も必ずしも高いものではなかった。大衆の関心はよりセンサーショナルな

ものへと移って行き、イギリスにおける仏教はこの後、神智学協会 (Theosophical Society) を筆頭とする、仏教を取り入れた〈混成宗教〉にその地位を取って代わられることになる。

一方、進歩的知識人の間では、キリスト教護教勢力との論争の中で浮上してきた前述の〈神義論〉の問題、およびそれを踏まえた社会倫理の問題が、次の検討課題として取り上げられるようになっていた。仏教もまた、その存在意義を社会倫理という問題圏の中で問い直されることになるのである。

### 三 論壇の最前線で議論されていた内容、そのレベル

#### 社会倫理の問題とスペンサーの〈社会進化論〉

前述のように、この当時のイギリスでは都市部への人口集中に起因する社会問題が深刻化しており、それを一つのきっかけとして、〈神義論〉の是非を検討しようという機運が言論界で高まっていた。その問題意識に直結する形で社会倫理——人間社会は倫理的であるか否か。また、社会における善とは何か——というテーマが俄かに注目されるようになった。

このテーマに対して、〈社会進化論〉 (Social Darwinism) という立場から一つの回答を提起したのがH・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) であった。スペンサーはアカデミックな訓練を受けていない在野の思想家であったが、生物学における〈適者生存〉 (Survival of the fittest) の法則が人間社会全般にも

働くとする独自の理論<sup>⑥</sup>を發表し、その思想は当時の流行哲学となっていた。

《適者生存》を強調するスペンサーのこの思想に従えば、生物は一般に、生存競争の中で環境により良く適応した者が生き残るという自然選択が繰り返される中で、種全体として進化していく、ということになる。これは必ずしも善、良なるものが生き残る、と説くものではない。しかし最も適応した者が生き残るというこの思想は、容易に「生き残ったものが善、良なるものである」という俗流の現状肯定の解釈に転化し得るものであった。事実、文字通り「弱肉強食」を自然法則として説くこの思想は、人間こそがこの世界の主権者であるという考え方を補強することになったし、さらには、当時世界で最も強力であったヨーロッパ人こそが、最も時代に適応しているという意味で最も優れた存在なのだという思想を育てることとなった。

また《適者生存》を前面に出すこの思想は《自由放任》を是とするものである。《生存競争》により弱者や敗者がふるい落とされることが結果的に種全体としての進化につながるというのであり、社会は下手な介入を受けず完全に自然状態で放置された場合にこそ最も早く進化し、弱者や敗者への扶助はいたずらにその進化のスピードを遅くするだけ、とされるのである。

スペンサーはこの進化の法則が生物個体の形質的側面のみならず精神的な側面についても、ひいては社会についても同様に働いていると主張する。もしそうであれば、人間社会の文明化

も、社会の成員に自由に競争させれば自ずとあるべき理想状態へと向かって進化を続ける。つまり人間社会の倫理性は自然状態において最も発揮されるのだから《自由放任》こそが最善の倫理的である、というのがスペンサー説に基づく社会倫理であった。

#### ロマネス・レクチャー

さて、このスペンサー流の自由放任による社会倫理の進化という考え方に反対したのがハクスリーである。共に進化論の擁護者として思想上の共通点も多かった二人だが、この点こそは両者の立場を分ける分水嶺であった。

では、ハクスリーの見解はどのようなものだったのだろうか。当時のイギリス言論界の中心テーマであったこの問いに対するハクスリーからの最終回答として提起されたのが、「進化と倫理」(Evolution & Ethics)と題された有名なロマネス・レクチャーであり、その講演録に序文「プロレゴメナ」を付して出版されたのが同名の書物『進化と倫理』(一八九四年)であった。死のわずか二年前に上梓されたハクスリー最晩年のこの著作は、《進化論》を軸に展開してきた一九世紀後半のイギリスの言論状況を常にその中心にあつてリードしてきたハクスリーの社会思想の集大成であり、この問題に対する彼なりの結論的見解だとみなすことができる。

ロマネス・レクチャーとは、ハクスリーの友人でもあつた生物学者のジョージ・ロマネス教授が一八九二年にオックスフォ

ード大学に開設した公開レクチャーであり、これは今日も続けられている。科学と宗教・文化・社会との関わりをテーマとした講演が行われるが、演題が講演者に任されていたこと、また、講演者の人選から、その内容は当時の言論界の状況を反映して自ずと《進化論》や社会倫理の方面に向くものとなった。

ハクスリーはその第二回講演の講演者として演壇に立つのであるが、その内容は学術研究者を主な対象とする講演会ということもあって、東西両洋の古典学への該博な知識を縦横に駆使した非常に高度なものとなった。これは「すべての宗教的伝統——東洋のそれ、イオニアのそれ、ヘブライのそれ——は倫理的体系を構築していると論じていることで、……ヴィクトリア時代の人々が文明と結びつけて考えていた倫理体系や正義の感覚を高度に発展させたのは、キリスト教だけであるという主張に反論」(パラディス他『進化と倫理』一九九五年、二四七頁)することを意図してのハクスリーの工夫であったが、結果的にその副産物として、一九世紀末イギリスのハイ・レベルな知識人階層が構成する論壇において、ヴェーダの思想、仏教といったインドの思想が、どういった典拠に基づき、西洋の伝統的な学問的知見との比較の上でどのように理解されていたか、またその水準を知る上で貴重な資料を我々に提供するものとなった。

### ハクスリーの社会思想の基本構想

『進化と倫理』に説かれるハクスリーの社会倫理思想の基本

構想の中核にあるのは「自然は非倫理的である」というアイデアである。スペンサーとは対照的に、彼は人為の加わらない《自由放任》という意味での《自然》(nature)を《宇宙過程》(cosmic process)と名付け、その基本的な性格について「neither moral nor immoral, but simply unmoral」である、とする。大宇宙・大自然の運行は、その背後に神の存在を想定できるような善なるものでも、秩序だったものでもないものであり、人間の生存にとつて都合などとは無関係に流れ行く奔流の如きものである、とするのである。ハクスリーは、人類の文明化の歴史は、この奔流のような《宇宙過程》の力に対抗して、ちょうど荒れ果てた野原に庭を造成していくように、人間の領域を少しずつ拡大していく試みであったと捉えている。この《宇宙過程》に対抗してとられる人為的な営みは《園芸過程》(horticultural process)と名付けられた。ハクスリーに従えば世界各地で発展・展開した文明とは、いずれもこの《園芸過程》の範疇に入るものということになる。

《宇宙過程》は外界のみならず、生物の内的世界にも存在している。人間について言えば獣的な本能がそれである。人間は外界についてと同様、この外界の《宇宙過程》に対しても《園芸過程》を以って対処していかなければならない。その過程で生まれるものこそ倫理であり、道徳であり、宗教なのである。

#### 四 ハクスリーの理論における仏教⇨静寂主義

という捉え方の意義

##### 〈宇宙過程〉と倫理思想

前述のようにハクスリーは、ロマネス・レクチャーにおいてキリスト教以外のいくつかの宗教的伝統の教義を挙げて、それらがいずれも独自に倫理的体系を構築していることを示すことで、〈宇宙過程〉に抗い、自らの生活圏を開拓してゆく営為としてこの倫理的的精神が人間精神にとって普遍的なものであることを示そうとした。

ただしその倫理的の精神の発露であるところの宗教的教義は、各々の時代・地域の人間が〈宇宙過程〉に対抗すべく發揮できた力の度合いに応じてそれぞれに限界を持つことになった、とハクスリーは考えた。レクチャーの中で彼は、主にインドとギリシアの思想、とりわけ仏教内外のインドのシュラマナの哲学と、ギリシアのストア派の哲学を取り上げて、それらを〈静寂主義〉(quietism)と一括りにして説明している。

インド思想、ギリシア思想は、それぞれ独自性を持つ思想体系であるにもかかわらず、ハクスリーは両者を一括りにする。これは、〈宇宙過程〉に対抗する人間の営為という切り口で見ると、この二つの体系は同じ段階にある思想とみなしうると判断されたからにはほかならない。つまり、圧倒的な力の差をもって人間の前に現前する〈宇宙過程〉に対し、人間知性が未だ

十分に対抗する力を持ち得ず翻弄されている段階にあって、人間の側でとり得る最善の策として考案されたのが、内的な自然である默的な本能を抑圧し〈宇宙過程〉との直接的な対決を避けるという〈静寂主義〉であり、その同じアプローチを取るものとして、古代インドの思想と古代ギリシアの思想は軌を一にしているといえられたのである。

「涅槃」(ニルヴァーナ)は「不動心」(アパティヤ)か

〈静寂主義〉という時、ハクスリーの念頭にあるのは、双方が理想の境地として唱える〈涅槃〉(nirvana)<sup>⑧</sup>と〈不動心〉(apatheia)であることは言をまたないだろう。

〈涅槃〉を論じる上でハクスリーは、当時のパトリ仏教研究における権威であるT・W・リス⇨デイヴィズ(Thomas William Rhys Davids, 1843-1922)、H・オルデンヘルク(Hermann Oldenberg, 1854-1920)の著作・講演録をかなり入念に読み込み、自説に逐一詳細な註記を付している。その意味で『進化と倫理』に見られるハクスリーの仏教理解は、恣意的なところのない、当時の学問水準の上限に迫る厳密なものであり、自ら理想とする「科学者」の姿を体現した立派なものだと見ることができ<sup>⑨</sup>る。一方で、仏教を含む古代インドの宗教を〈静寂主義〉と捉える理解の仕方それ自体は、ヨーロッパの言論界では「仏教徒」とみなされることが多かったA・シヨーペンハウエル(Arthur Schopenhauer, 1788-1860)の説以来、ある種ステレオタイプ化した見方といえ、仏教の解釈としては凡庸の域を出な

い。

ストア思想の理解についての評価は筆者の手に余るが、仏教やインド思想の扱い方を見る限り——西欧知識人としてギリシア・ローマの古典についての造詣は当然のこと深かっただろうが——、〈不動心〉の理解もおそらく〈涅槃〉の扱いに準じた良くも悪くも厳密に「科学的」なものだったのだろうと推測される。

いずれにせよハクスリーは、〈涅槃〉〈不動心〉それぞれがもつ固有の特徴をほとんど捨象してしまつて、「本能の滅却あるいは完全な制御」という一点に絞つて括りだし、自らの体系の中の一段階として組み入れているのである。多くのあるはずの特異性を捨象してしまつて、〈涅槃〉（ニルヴァーナ）と〈不動心〉（アパテイア）を〈静寂主義〉という一つの——ある意味ステレオタイプな観点から——一括りにしてしまうこと、これが良くも悪くもハクスリーの古代宗教の捉え方であつたと総括できるだろう。

## 五 まとめ

古代インドとギリシアの思想を〈宇宙過程〉との対決を避けた〈静寂主義〉と一括したハクスリーはその後、科学・技術を手にした近代ヨーロッパ人に話題を移して、自分達は人類史上初めて〈宇宙過程〉に対抗し得る現実的な力を手にした存在なのだ、と宣言する。続けて彼は、今こそ人類は、人間精神に潜

在している〈良心〉や〈共感〉に基づき、〈宇宙過程〉に対抗して倫理的に最良のものを人為的に残していくべく、科学・技術の力を積極的に活用すべきだと説く。〈宇宙過程〉に対抗する術を持たない無力な古代人が夢見たであろう倫理的な社会を今こそ現実のものとすべく立ち上がるのが近代人の使命だと聴衆を鼓舞するのである。

以上、一九世紀後半のイギリスの言論界を代表する進歩的知識人T・ハクスリーをとりあげて、当時の知識人が、その時代特有の思想環境の中で、周囲で進む異分野の学術研究の成果も取り入れながらどのように自らの思想を体系化していったかということを見てきた。

ハクスリー個人の仏教理解ということ言えば、その内容がパリー仏教の範囲に限られているなど限界もあり、あまり見るべきところはない。しかしながら、自己の問題意識に応じて古今東西の思想を研究・整理し、しっかりと咀嚼した上で自らの思想体系の中に位置づけてゆく彼の手法は、それ自体、比較思想研究の一つのモデルケースと見ることができよう。彼は仏教研究者でもストア哲学研究者でもなかったが、比較思想の先駆的な実践者だったのである。

## ■文献一覽

J. Jeffrey Franklin, *The Lotus and the Lion: Buddhism and the British Empire*, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publisher Pvt. Ltd., 2009.

佐々木一憲「研究ノート」ラファディオ・ハーンの〈総合仏教〉と〈近代

仏教学」『パリ学仏教学研究』第三号、パリ学仏教文化学会、二〇〇九年。

ジエームズ・バラディス／ジョージ・C・ウィリアムズ『進化と倫理―トマス・ハクスリーの進化思想―』（一九八九年）小林傳司他訳、産業図書、一九九五年。

松永俊男『ダーウインをめぐる人々』朝日出版社、一九八七年。

- (1) しかしこのオックスフォード論争の真相は巷間伝えられている所とは大分違っていたようだ。松永俊男（1987）参照。
- (2) ハクスリーは科学の中に科学的に検証できない思弁的な要素（形而上学的議論や神秘的要素）が交じることをことのほか嫌った。
- (3) Franklin (2009) Chapter 2.
- (4) コントは人間の思想は神学→形而上学／哲学→科学という三段階を経て進化・発展するという〈三段階の法則〉(Loi des trois états)を唱えた。これは宗教に対する科学の優位を唱える際にもち出される定番の論拠の一つである。
- (5) F・マックス・ミューラーがオックスフォードに招聘され、比較文献学講座の主任教授となる。彼は「東洋聖典叢書」の発刊などを通じて一般読者層に東洋の宗教を紹介する役割を担うが、それ以降ヨーロッパにおける東洋学の中心はロンドンに移ることとなった。
- (6) 個人間あるいは国家間の生存競争によって社会が進歩するという主張。彼の〈総合哲学〉は〈胚におけるフォン・ペーアの法則〉にヒントを得た、一様性から多様性へと進む分化増加の法則性というアイデアに貫かれている。
- (7) 第一回は護教派で首相のグラッドストーン、第二回がハクスリー。
- (8) ここでは仏教外の入滅の境地も「涅槃」とされている。
- (9) 例えば、ニルヴァーナに関して仏教での理解と他のインドの宗教におけるその微妙な違いを明確に区別して描写している点や仏教のニルヴァーナが虚無主義とは異なると指摘している点などは、ハクスリーの読解の厳密さを示すものと言えるだろう。

(ささき・かずのり、インド中観派・近代仏教学、

公益財団法人中村元東方研究所専任研究員)

(本研究は平成二二―二四年度 科学研究費補助金若手研究 (B)「ラフカディオ・ハーンの仏教観形成と〈近代仏教学〉」(課題番号: 22720097)の研究成果の一部である)